

## 目次

第20回大会関連	P1	ソシオロジー Rooted in Life	P8
大会開催要項等	P4	第38回 IIS 大会での日中社会学会	
大会プログラム	P5	主催セッションについて	P17
大会会場へのアクセス	P7	事務局からのお知らせ	P18

---

## ■第20回大会関連

### ■日中社会学会大会20回記念大会にあたって

中村則弘（日中社会学会会長）

日中社会学会大会が始まったのは、もはやふた昔も前のこととなった。喜ばしい限りである。一方で、この大会が、30回、40回の記念大会に向けた新たな出発点となることを祈念してやまない。

思い起こせば、1回大会は福武直の記念講演「中国研究30年の回顧と展望」で幕をあげた。確か1日の日程で、報告者は数人であったと記憶している。それから20回を重ねたわけである。会場設定、講演者手配、報告準備、会報作成などをめぐる草創期の辛苦が、走馬灯のようによみがえる。日中社会学叢書の「刊行にあたって」でも記したが、歴代の会長・事務局長・各理事のひとかたならぬ努力があつて、現在に至ることができたと実感している。この場を借り、福武直先生、青井和夫先生、宮城宏先生、根橋正一先生、石川晃弘先生、安原茂先生、そして塩原勉先生に心からお礼を申し上げたい。また、元理事の方々にも心から感謝いたしたい。

歴代の方々に思いをはせつつ、これからを担う若手諸氏に強くお伝えしたいことがある。それは本学会が、会員の「志」と「思い」に大きく支えられてきたことである。大会運営はもとより、研究集会の開催、紀要・ワーキングペーパー、さらには関連叢書の刊行にいたる事業の展開はまさにそうであった。将来を担う若手を育てることに重きをおく方針が貫徹できたこともそうであった、とりわけ後者は、本学会の創設以来の方針であり、これからも堅持すべきと考えている。しかし、このような運営のあり方が、「志」と「思い」を共有する中堅以上の方に、大きな負担をかけてきたことも事実なのである。目先の利益に左右されたならば、こうした方針を維持できるはずもなかったことは、身をもって経験している。

近年の学術研究をとりまく環境をみると、どうにもせちがなく、とりわけ若手を目先のことに囚われがちにさせている。蛸が自分の足を食べるが如く、学術活動の基盤をも崩すのではという危惧すら覚えている。そのような状況であればこそ、日中社会学会の存在意味は大きいと思えてならない。若手諸氏には、この状況を見据えつつ腹を据えて本学会の活動を支え、それ

を超えた新たな時代を拓くことを切に望みたい。

古参会員の老婆心からの叱咤はこれくらいとし、多彩な特集シンポ、書評シンポ、記念講演、自由報告など、日中社会学会なりの形ができ上がってきたように思う。これもまたうれしいことである。ただ考えてみれば、本学会の大会では、シンポジウムと記念講演の比重が高い。これらの事前準備は理事や事務局に、他学会では思いもよらない膨大な作業を課していることも事実である。準備のために奔走しておられる理事、事務局に感謝の意を表したい。

苦労は多いが、時代はわれわれの活動のさらなる進展を求めていると確信している。一方で、われわれがトランスナショナルな学会を目指し取り組むべき課題は数知れない。とりあえずでも、中日社会学会との共同プロジェクトの推進、中国での研究集会の定期開催、中国における研究者のネットワーキング、類例をみない形でのワーキングペーパーの刊行、新たな形での叢書出版など、差し当たりのものも山積みである。そのなかにあって、改めてこの20回大会を、とりわけ若手諸氏に向けた新たな出発点と位置付け、われわれの決意を新たに作る機会としたいのである。大会開催に関する大会担当理事、研究担当理事、事務局からの企画や情報に接する限り、その最適の機会と断言できそうである。

## ■日中社会学会第20回大会を お受けするにあたって

根橋 正一

(第20回大会実行委員長・流通経済大学)

東 美晴

(第20回大会実行委員・流通経済大学)

今回の大会は日中社会学会20周年の記念大会となります。気軽にお引き受けしたものの、実際に大会が近づくにつれ、果たして20周年にふさわしい大会を開催することができるのか、プレッシャーがどんどん大きくなってまいります。

20年前、日本社会学会大会に乗じて総会を開催していた日中社会学会の、独自の研究大会は早稲田大学で開催されました。当時、中国は改革開放に突き進む時期で、開放的な雰囲気満ちており、日本の社会学研究者たちの2～3のグループの現地調査も始まっていました。日中双方の社会学者の共同研究もスタートしていました。しかし、この自由は天安門事件ともつながっていました。1989年6月4日、天安門広場に座り込んだ市民・学生の中に戦車が突入するニュース映像を繰り返し見た翌日、私たちは日中社会学会第1回大会のために早稲田大学に集まったのでした。それ以来、中国社会的な変化を身近に感じつつ、本学会大会も20回を迎えることになりました。流通経済大学での開催は2回目になります。前回は青井和夫元会長の下、茨城県龍ヶ崎キャンパスでしたが、今回は千葉県新松戸キャンパスで、皆様をお迎えいたします。

さて、今年は奇しくも北京オリンピックが開催される年でもあります。それにもかかわらず、1月末には毒物混入餃子事件は、日中関係に今までの政治的文脈とは異なる形で問題を投げかけることとなりました。さらに、3月にはラ

サにおいて発生したデモを発端に、中国ーチベット間の関係は世界的関心事になりました。その結果、聖火リレーは、チベット独立支持者と中国系住民との間において、人権か愛国かを表現する政治の舞台となりました。

これら一連の動向が反映するものは、グローバル化する経済を背景に再編された国社会の現実、すなわち民族あるいは都市・農村間の格差、急激な近代化のツケとしての環境問題などであると考えています。また、これは中国と他の国々との間に大量のモノや情報が相互に顔が見えないままに行き交う現実を作り出し、いかに信頼関係を構築するかという問題を投げかけます。

今回の大会では、グローバル化する経済の下での中国を照射することを目的に、環境と移動を最初のシンポジウムのテーマといたしました。また、移動のテーマはミニシンポにおいて、形と角度を変え再度、議論されることとなります。さらに、最後のシンポジウムにおいては、中国という枠を越え、東アジア全体を視野に入れたディスカッションが行われることになっております。未来を見据えた、意味深い討論がなされることを願っています。

## ■日中社会学会

### 第20回大会の開催にあたって

浅野慎一（大会担当理事）

6月7～8日、流通経済大学(新松戸キャンパス)におきまして、第20回大会が開催されます。

今回は第20回の記念大会でもあり、特別記念講演として原宗子先生に中国の環境問題について、歴史社会学の視野から、雄大かつ縦横に語っていただきます。

原先生のご講演を受け、シンポジウム(PART1)「現代中国の環境変動と人の移動」を開催します。現在、中国における環境問題、および人の移動は、世界的にも最も注目を集めている二大テーマといえるでしょう。しかもこの二つのテーマは、極めて密接に関連しあっています。それはいずれも極めて中国的であると同時に、中国発のグローバルな社会現象でもあります。クロスオーバーする二つのテーマから、中国社会と世界社会を把握する新たなパースペクティブが生み出されることを期待しています。

大会二日目には、王向華先生に基調報告をいただき、シンポジウム(PART2)「東アジア研究の批判的検討と今後の課題—個性と普遍のせめぎあいから」を行います。今日、日中社会学も単なる日本と中国の二国間関係・比較だけにとどまらず、東アジア社会を把握するトランスナショナルなまなざしが求められています。

「中国的」、「日本的」、そして「東アジア的」な個性とその基底を貫く普遍性をどのように捉えるか、刺激的な議論がなされることを期待しています。また、自由報告も予定しています。ご期待ください。

会員諸氏の積極的な参加をいただき、今回の第20回大会が実り多きものとなりますよう、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

## 〈第 20 回大会開催要項〉

日時：2008 年 6 月 7 日・8 日

会場：千葉県松戸市

流通経済大学新松戸キャンパス

参加費：一 般 2000 円

学 生 1000 円

非会員 2000 円

懇親会費：5000 円（一般）

2500 円（学生・退職者ほか）

懇親会会場：銀座スエヒロ

（流通経済大学新松戸キャンパス内）

## ■第 20 回大会 論著資料の配布コーナー 及び書籍販売コーナー設置のお知らせ

首藤明和（事務局）

大会参加者相互による論著資料の配布コーナー（受付付近）を設置します。

是非、論文、研究報告書など、お手元にある論著資料をご持参ください。論著資料は、抜刷、コピーどちらでもかまいません。設置コーナーにて配布していただきます。

また、会員諸氏の著書などをそれぞれ持ち寄っていただき、販売する、書籍販売コーナーも設置します。情報交換や研究成果のアピールの場として、この機会を是非、ご利用ください。

## ■日中社会学会第 20 回大会 開催校の連絡先

流通経済大学 新松戸キャンパス

〒270-8555 千葉県松戸市新松戸 3-2-1

TEL 047-340-0001

FAX 047-340-0020

## ■大会担当実行委員の連絡先

流通経済大学社会学部 東 研究室

〒301-8555 茨城県龍ヶ崎市 120

TEL 0297-60-1837

E-mail : azuma@rku.ac.jp

前日、または当日の連絡は、  
実行委員携帯 090-9719-2266  
をお願いします。

## ■第 20 回大会 中国の大学・中国の研究 機関紹介コーナーなど設置のお知らせ

首藤明和（庶務担当理事）

中国の大学・中国の研究機関の紹介コーナーを設置いたします。中国の大学・研究機関に関する資料やコピーなどを、みなさまから持ち寄っていただき、学会参加者のあいだで情報交換することを目的とします。海外を活動拠点とする「在外会員」との研究者ネットワークの構築や留学先の情報収集など、幅広い研究者・研究交流のきっかけとなることを願っております。

また、若手研究者の自己アピール、他学会の紹介、中国・欧米の研究動向の紹介などに関する資料配布コーナーも設置します。ご希望の方は大会当日、関係資料を持参の上、当コーナーにて展示、配布するなど、各自ご利用ください。

## 日中社会学会第20回大会プログラム

開催日：6月7日（土）・6月8日（日）  
会場：流通経済大学・新松戸キャンパス（5階・6階）  
（JR新松戸駅から徒歩4分）

（注）プログラムは一部変更となる場合があります。  
当日会場にて配布される資料でご確認ください。

### 第1日 6月7日（土）

12：00～ 受付

13：00～13：05 開会式（5階503教室）  
中村則弘 会長挨拶  
司会 首藤明和（兵庫教育大学）

13：10～14：20 特別講演「中国歴代の社会変動と環境」（5階503教室）  
原 宗子（流通経済大学）  
司会 根橋正一（流通経済大学）

14：30～16：30 シンポジウム PART1「現代中国の環境変動と人の移動」（5階503教室）

#### 報告者

浜本篤史（名古屋市立大学） 「中国・三峡ダム開発と立ち退き移転者」  
包 智明（中央民族大学） 「中国内モンゴルにおける砂漠化と生態移民」  
洪 波（福建華僑大学） 「グローバル化下の中国におけるエコツーリズム」

#### コメンテーター

西原和久（名古屋大学大学院）  
東 美晴（流通経済大学）

司会 浅野慎一（神戸大学）

16：35～17：30 総会（5階503教室）

18：00～20：00 懇親会（会場：3F 銀座スエヒロ）

#### 受付の近くにて

- 論著資料の配布コーナー（論文の抜刷やコピー、調査報告書などの配布）
- 書籍販売コーナー（著者割引での販売など）
- 中国の大学・研究機関紹介コーナー（資料やコピーなどを置いておく）
- その他（若手研究者の自己アピール、他学会の紹介、中国・欧米の研究動向の紹介など）

第2日 6月8日(日)

9:00～ 受付

9:30～12:00 一般自由報告(6階603教室)

司会 長田 洋司(早稲田大学)

- 1) 松木孝文(名古屋大学大学院)  
「日本の地方都市における中国人技術研修生・実習生—四国瀬戸内沿岸地域の実地調査に基づいて」
- 2) 鄭南(中部学院大学)・曹陽(撫順社会科学院)  
「社区住民の生活と家族・親族ネットワーク—撫順市での住民調査を通して」
- 3) 斎藤あつ子(早稲田大学大学院)  
「『魔都』に隠された国民国家誕生の思想—「me」としてのオキシデンタリズム」
- 4) 呉偉明(香港中文大学)  
「『貞子』が『キョンシー』にめぐりあって——日本ホラー映画要素の香港化について」
- 5) 宮田紀靖(瀋陽師範学院)  
「中国の2008年現在——国家社会主義と民主主義をめぐる諸問題【オリンピック関係】」

13:10～14:40 ミニシンポ(5階503教室)

「チャイニーズネスとトランスナショナルアイデンティティ」

コーディネーター 永野 武(松山大学)

報告者 穂山 新(筑波大学)「中国におけるエスニックネーションの起源」

南 誠(京都大学)「中国帰国者」の歴史/社会形成」

14:50～16:50 シンポジウム PART2(5階503教室)

「東アジア研究の批判的検討と今後の可能性——個性と普遍のせめぎあいから」

基調報告 王 向華(香港大学)

司会 首藤明和(兵庫教育大学)

討論者(五十音順)

東 美晴(流通経済大学)

石井健一(筑波大学)

呉 偉明(香港中文大学)

黒田由彦(名古屋大学)

陳 立行(日本福祉大学)

中村則弘(愛媛大学)

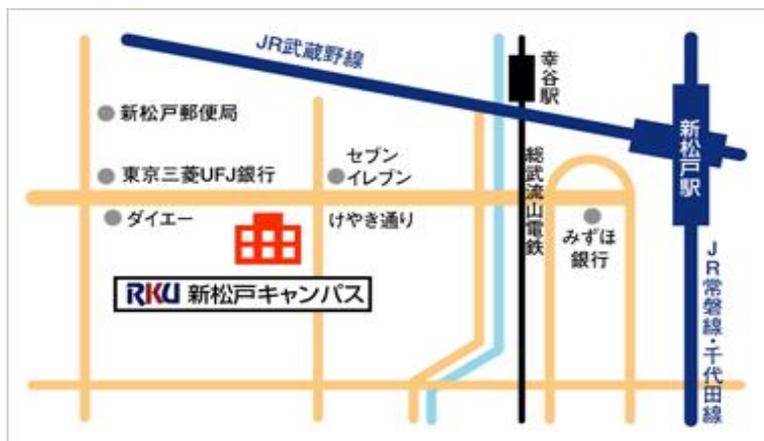
根橋正一(流通経済大学)

16:50～17:00 閉会のあいさつ(5階503教室)

大会担当理事 浅野慎一(神戸大学)・西原和久(名古屋大学)

大会実行委員 根橋正一(流通経済大学)・東美晴(流通経済大学)

## ■会場へのアクセス



- JR 武蔵野線  
南浦和駅より 30 分  
西船橋駅より 20 分
- JR 常磐線  
上野駅より 30 分
- JR 武蔵野線・常磐線  
新松戸駅より徒歩 4 分

## ■ホテル

新松戸キャンパスは都内（上野）から 30 分の場所にありますが、新松戸に宿泊される場合には、新松戸ステーションホテルの割引宿泊が可能です。宿泊を希望される場合は、大会実行委員に一週間前までにご連絡下さい。

- 新松戸ステーションホテル
  - ・〒270-0034 千葉県松戸市新松戸 2-120
  - ・TEL 047-343-7111 FAX 047-343-7117
  - ・料金：シングル 8,196 円 → 6,550 円  
ツイン 14,700 円 → 11,760 円
  - ・立地：新松戸駅より徒歩 1 分

## ■ ソシオロジー Rooted in Life

### インドネシア華人企業家・唐裕 波乱万丈の人生を送った第2世代海外華人

香港中文大学歴史学科・兼任助理教授  
合田美穂

2007年11月、インドネシア国籍でシンガポールに居住する1人の華人企業家の歓迎会が、長春市副市長によって開催された。筆者はその報道で、現在80歳を越えるその企業家の活躍を再確認すると同時に、非常に懐かしい気持ちになった。その企業家の名前は唐裕（トン・ジュウ）。筆者が1990年代後半にシンガポールで研究に従事していた際に、10回以上にもおよぶ面接調査に対して、福建省安溪の鉄観音を入れて、こころよく対応してくれた企業家である。近年、中国を訪れる海外華人企業家は増加の一途を辿っているが、唐裕のように「政商」、「民間大使」、「慈善家」などとしての顔を持ち、三カ国にまたがって活躍している華人企業家はさほど多くはない。今回、コラムを書かせていただくにあたり、波乱万丈の人生を歩んできた華人企業家・唐裕についてご紹介したいと考えた。

1926年にインドネシアで生まれた唐裕は、8歳の時にシンガポールにいる兄を頼ってシンガポールに渡り、中国語教育を受け、18歳で海運業に従事するようになった。1950年代、製油業が本格的に開始されたばかりのシンガポールで、唐裕はシンガポールとインドネシア間の石油の輸送を手がけ、1957年には彼の経営するTUNAS社が、インドネシア国家石油公社の駐シンガポール総代理に指定されるまでとなった。1950年代後半から1960年代にかけて、同社は全盛を極め、最高時には200隻のタンカーを所有しており、シンガポールの永住権を獲得した唐裕は「シンガポールの

海運王」とも称えられた。裸一貫に近い状態から身を立てた華人企業家は「白手起家」と呼ばれるが、唐裕も同様であった。

唐裕は1945年、インドネシアのスカルノ政権樹立に際して、軍部に物資を調達し、政権の樹立を助け、その後のビジネスを通してスカルノ大統領と深いつながりを築き、インドネシアで「政商」と呼ばれるようになっていった。「政商」は、時の政治権力が存在する間は安泰であるが、政変によって反対派が政権を握ると失墜する。1998年、インドネシアのスハルト大統領退陣によって、「政商」として知られた林紹良（スドノ・サリム）が一瞬にして莫大な富を失ったことを記憶されている方も多いだろう。

移民二世代の華人である唐裕は、「落葉帰根」と「落地生根」双方の感情を併せ持っている。1960年代、唐裕は、中国銀行シンガポール支店の開設を積極的に支援し、中国のシンガポール進出の突破口を開くことに貢献。当時、シンガポールは1965年にマレーシアから分離独立、同年インドネシアでは9・30事件が発生し、スカルノ政権が揺らぐことになるなど、政変が立て続けに起こった。そのような波乱の中、唐裕はインドネシアの政府高官に対し、シンガポールとの国交樹立を積極的に助言し、1967年、両国の間で国交が結ばれた。インドネシアでは同年、スカルノからスハルトへ政権が交代したが、シンガポールとの国交樹立やインドネシアの経済発展の立て役者である唐裕は、失墜するどころか、スハルト新大統領からも信望を得たのである。唐裕は、1990年のインドネシアと中国の国交樹立、その直後のシンガポールと中国の国交樹立に際しても、両国と中国の要人との「根回し工作」で、陰ながら大きな役割を果たした。1960年代以降、唐裕は、積極的な中国（特に父親の出身地である福建省安溪）への支援

や慈善活動、中国でのビジネス活動を通して、李鵬や朱鎔基など中国の要人からも信頼を得てきた。唐裕のこういった人脈と信頼関係は、三国の外交関係にも大きく役立ったのである。スハルト大統領退陣に際して発生した排華暴動直後の1998年8月、唐裕は、インドネシア政府から国家への貢献をたたえられて、プラタマ国家勲章を受章した。

唐裕が筆者との面談中に電話をかけたことがある。後で唐裕は「今の電話の相手はスカルノ元大統領の娘のメガワティだよ。シンガポールに到着したばかりだ。私が、彼女の父親を失脚させたスハルト大統領と親しいのにもかかわらず、彼女は交友関係を続けてくれている。これから滞在先のホテルに会いに行くことになっている。」と話してくれた。筆者はその時、まさかその翌年にスハルト大統領が失脚し、その数年後、メガワティが大統領に就任することになるとは想像もしなかった。メガワティの大統領就任後、インドネシアでは華人が次々と国会議員に立候補。中国語教育が56年ぶりに正式に承認され、華人の伝統行事である春節が初めて祝日に指定されたことは記憶に新しい。

シンガポールでは、唐裕は「慈善家」としても、多くの華人から絶大な評価を得ている。唐裕が長年にわたりシンガポールで、安溪会館主席、中華総商会理事、海星中学校および工商小学校等の学校理事を歴任。華人社会を中心に多額の寄付をおこない、シンガポールの発展に多大な貢献をしてきたからだ。「これまでの人生で得られたものは金銭ではなく、知識と友情である。」と常に語っていた唐裕のことが、今でも時々思い出されるのである。

## 躍動するマカオ——1日取材日記

香港中文大学  
宮崎紀子

1999年の中国への返還後、2002年1月に中国本土から香港・マカオへの旅行人数枠が撤廃され、また、同年2月には40年に及ぶ1社によるカジノ経営権独占時代が終わり、マカオも新たな時代へと突入した。とりわけここ数年、マカオが凄い、というのは香港に住んでいるといろいろな話を聞くからである。例えば、04年以降、ラスベガス系巨大カジノ場がいくつもできたり、05年に古いカトリック教会や広場などが世界文化遺産に登録されて観光客が増え、今年6月には仙台からチャーター便が就航することになっていたり、不動産の価格が上がっていて、私にもなぜかマカオのマンションの投資話が持ち込まれたり、なんだか街が大いに沸いている。そんなマカオの躍動を感じるべく、久しぶりに日帰りマカオに行ってみた。このコラムはその一日の記録である。

4月某日の朝10時、上環のマカオフェリーターミナルからフェリーに乗ってマカオへ向かった。香港とマカオはフェリーで55分しかかからない。船でたった1時間で、こちらにはイギリス、あちらはポルトガル風情が楽しめ、香港人にとっては身近に外国旅行気分を味わえる街だ。資料によると、マカオの特別行政区政府は、マカオを国際的な会議・展示場として売り込みたいらしい。ならば、ということで、マカオの2大国際会議場を有する、マカオタワーとザ・ベネチアンに行ってみた。

まずはタクシーに乗って、マカオタワーを訪れてみる。テレビ塔でもあるこのタワーは中国広東省西部に電波を送っている。中には会議場やレストランの他、バンジージャンプ

を楽しめる施設もある。エスカレーターを上がり、日系企業がセミナーを開いている部屋を通り抜けると、そこにはオープンテラスがあり、外に出てマカオの街を眺望してみた。端午の節句にドラゴンボートのレース会場となる南湾湖が向かいに見え、少し離れたところにはマカオのシンボル・蓮の花を模ったビルが建っている。ふと下を見下ろすと、バンジージャンプの着地点の近くにポールが3本並んでいて、マカオの旗と中国の旗がはためいていた。マカオの旗は緑地に中央に白い蓮の花を置き、花の上に5つの黄色い星を並べたもの。緑色はポルトガルを、蓮の花はマカオを、5つの星は中国を象徴している。中に戻って、あちこち見て回ったが、確かに規模の大きな会議場はあるものの、全体的に落ち着いた感じで、窓からは海も見え、マカオの景観に調和しているように思えた。

次はいよいよあの、ザ・ベネチアンである。2007年に日本円で約2688億円をかけて建設されたこの施設は、ラスベガス・ベネチアンとデザインがほぼ同じでその規模は2倍だ。周囲には建物がまだなく、空き地に突然というか唐突にラスベガスの1区画が出没した感じである。全3000室のすべてがスイートルームというホテル、ショッピング・モール、アリーナ、展示場、プール、カジノなどがあり、映画館やゴルフコースも建設中である。中でも話題なのは建物の中を流れる運河だ。どう聴いてもプロの歌声の船頭さんが漕ぐゴンドラに乗って、川下り？を楽しめる。ちなみに大人1人の乗船料は150マカオ・パタカ（日本円で約2100円）と結構高い。肝心の展示場だが、東京ビッグサイトよりも2万㎡大きく、その規模から言っても、世界のトップレベルと言えるのではないだろうか。それにしても、ザ・ベネチアンは中を歩いている観光客の人達が皆、すごく楽しそうな顔をしていたのが印象的だった。非現実的なほどの豪華さと圧倒的なスケールは、大

人の夢の国という感じだろうか。

その後、街の中心部へ移動し、地元マカオ人で弁護士をしているAさんにインタビューを行った。彼曰く、マカオの人たちは街の激しい変化になんとか追いついて行こうと皆必死だということだった。昔は静かな街だったのに、今では新たなプロジェクトについての話があちこちで聞かれ、ラスベガス系カジノの進出に伴うアメリカ文化の流入など、全てが新しい経験でスピードも速く、それに順応して行こうと一生懸命ということだった。Aさんからは興味深い話をいろいろ聞いたが、紙幅の関係で、書ききれないのが残念なところ。

マカオは香港以上に歴史が古く、東西文化の交配があり、文化的に発展していると言う人も多い。人口約50万人、面積は香港の50分の1しかないこの街が今後どう進化していくか、これからも動向に注目していきたいと、帰りのフェリーの中で考えた。

## 日本との出会い・研究との出会い

神戸学院大学非常勤講師  
陳 鳳

日本で住むようになってから、すでに16年が経ちました。いまはどこへ行っても不自由を感じることはありませんが、はじめて日本に来た頃のことはいまでも鮮明に覚えています。それは1985年のことでした。当時、仕事の関係で一ヶ月東京に滞在し、毎日、宿泊のホテルから20分ぐらい歩いて、新宿センタービルにある研修先の会社へ通っていました。わたしを含め、団員全員が日本は初めてでしたので、最初はどこへも寄らずに、ホテルと研修先の「二点一線」の生活をしました。一週間ぐらい経った頃に位置関係が分かっ

て周辺環境にも慣れたので、センタービル近くのレストランで夕食を食べてからホテルへ帰るようになりました。

12月に入ると、クリスマスや年末に向けて、どこの店も買い物客で賑わっていました。80年代の中国と比べると、店の品が豊富で、洋服もとても綺麗で、私たちは「眼花缭乱」、「さすがは経済大国ですね」との思いでした。店に寄るようになってから、帰るのも自然に遅くなりました。いままで、昼間の街しか見ていなかったのですが、夜の街も見えるようになりました。なかでも一番びっくりしたのは、高層ビルの地下や地下通路はホームレスで溢れていたことでした。それまで日本にホームレスがいると聞いたことはありましたが、自分の目の前に、寒い中、こんなにたくさんホームレスの人びとがいるのを目の当たりにして、自分の目を疑いました。研修先の日本人の社員に聞いてみると、かれらは怠け者ですと答えてくれましたので、私たちもきつとそうだと信じていました。

数年後、ホームレスの実態調査をきっかけに、私のホームレスに対する考えが変わりました。私が通っていた大学に都市社会学を専門とする先生がいて、先生の授業を取っている院生は社会調査をしなければならず、わたしもその一員でした。その年、わたしたちの調査対象はホームレスでした。わたしを含め十数人の院生がホームレスに対する先入観もあって、最初のうち、なかなかホームレスと会話する勇気がありませんでした。でも、調査をしなければレポートが書けないので、パートナーの院生と勇気をだして、まず、一人目のホームレスの男性に声をかけました。その後、二人目のホームレスとの会話もできました。わたしたちは調査項目に沿って質問をしましたが、彼らは、わたしたちの質問のほとんどに答えてくれました。二人とも、60代の男性でした。ホームレスになった原因を聞いたところ、1人は若い頃は建築業の仕事

をしていたが、けがをしたので重労働ができなくなり、しばらくレストランで働いたが、年をとると雇ってくれる人がいなくなって、ホームレスになったと話してくれました。もう1人は、鉱山で仕事をしていましたが、鉱山が閉鎖、仕事がなくなり、大阪へ出稼ぎにきたそうです。しかし、定職につくことができず、日雇い労働者として働いてきたが、年をとってからは雇ってくれるところがなくなり、現在の生活をするようになったということでした。なぜ、地元に戻らないか、と聞きましたら、一度ホームレスになると、世間の目もあって、家族に迷惑をかけるから、戻りませんと答えました。

今回の調査を経て、物事は表面だけではなく、内面を知ることが一番大事だと思うようになりました。このことは、わたしの研究姿勢に大きな影響を与え、いまに至っています。

ちょっと話がかわりますが、3月中旬に中国に帰りました。日本に戻ってきたら、テーブルに明石書店の吉田さんから送られてきた『分岐する現代中国家族』の本が置いてありました。この本を手にした時、そして、自分の名前が執筆者として載っているのを見て、とても感動しました。それまでに何度も校正のやり取りをしていたので、いずれ出版されることは分かっていたのですが、実際に現物を手にした時の感動は、想像よりもはるかに大きなものでした。

執筆を始めてから、出版するまでの日々を振り返ってみますと、自分なりの努力もありましたが、編著者の首藤先生の丁寧なご指導がないと、とても完成できませんでした。この場を借りて首藤先生に深く感謝を申し上げます。またこの機会を与えてくださった日中社会学会の皆様に感謝申し上げます。今後とも、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

## あなたの“事業”は何ですか

早稲田大学アジア太平洋研究科博士課程  
齋藤あつ子

他者と会話をするという事は、言葉を通じて意味を共有するという事です。中国人と中国語で話していると、多くの新しい発見があります。日本人と日本語で話しているときには、鈍くなっている感性のようなものが活発になります。つまり、意味を共有できていないことに気づき、とまどいを感じるということなのです。

最近、わたしを一番悩ましている（楽しませている？）中国語の単語、それは、“事業”です。中国語の“事業”を日本語の“事業”とかなり異なる使い方をされ、全く意味を共有できなかったことがあります。たとえば、中国語であなたは「自己的事业」をもっているかと聞かれたとします。日本語の意味世界で理解すると、実業家かどうか聞かれたのかと思います。実業家ではないので、もっていないと答えます。すると、哀れみに満ちた目を向けられ「自己的事业」をもったほうがいいと助言されます。なぜここで急に起業を勧められるのかと不審に思いつつも、何がどうおかしいのかよくわかりません。二人の会話は成立しているようでしていません。

岩波書店『広辞苑』の“事業”という項目には、「①社会的な大きな仕事。「慈善事業」②一定の目的と計画とに基づいて経営する経済的活動」と記されています。日本語の“事業”の意味はだいたいこんな感じでしょう。

さて、中国語の“事業”のほうはどうでしょうか。大修館書店の『中日大辞典』には、「①事業。②（生産収入がなく国家の下におかれる）事業。③計画、企て」とあります。また、「事業心強」で、「事を成そうとする意欲があ

る」と書かれています。小学館の『中日辞典』には、「①事業；（社会的）活動」とあり、用例として「革命事業」が挙げられています。また、小学館と講談社の『中日辞典』には、“事業”とは別に「事業心」の項目があり、「仕事に対する情熱や使命感」と記されています。角川書店の『中国語大辞典』には、「事業心」として、「全身全霊、その仕事や事業にたずさわる精神、使命感」、「革命事業心」として「革命的使命感」とあります。

商務印書館の『現代漢語辞典』には、「①人所従事的、具有一定目標、規模、和系統而对社会发展有影响的经常活动」とあります。用例として、「革命事業、科学文化事業、事業心強、共産主義事業」が順に挙げられています。同じく、商務印書館の『中英辞典』では、① cause; undertaking、革命事業 revolutionary cause、共産主義事業 the cause of communism、文化教育事業 cultural and educational undertakings。② enterprise; facilities」となっています。また、「事業心 devotion to one's work; dedication」とあります。団結出版社の『近代漢語辞典』では、「工作、活 er」となっています。

日本語には「事業心」という言葉は存在しません。また、中国語の“事業”の用例には、「革命事業」や「共産主義事業」が多く挙げられています。ここから、中国語の“事業”は、共産党革命と深い関連があったことがわかります。

辞書の定義を越えた、生きた言葉としての“事業”の意味を探るべく、数人の中国人に“事業”についての考えを聞かせてもらいました。その中で、とても印象に残っているのは、魅力的な人間は「自己的事业」をもっているという考え方です。結婚するなら「自己的事业」をもっている人がいいそうです。（決して実業家と結婚したいという意味ではありません、念のため。）このような意味で、“事業”を語るとき、“事業”は人間の人生や夢、

幸福と関連して捉えられているようです。“職業”とは違います。

わたしには中国の“事業”が現代産業社会における“天命”のように感じられてなりません。“天命”は天から特別な人に与えられるものですが、“事業”は誰もが自ら選択し、運営するものです。“天命”は「知る」ものでしたが、“事業”は「所有する」ものです。そして、「自己的」に象徴されるように、人によってさまざまであり、かつての「革命事業」のように国民全体で一つの“事業”に取り組むわけではありません。“事業”という言葉には、“天命”よりもずっと人間の主体性と個性が感じられます。

このように中国語の“事業”の意味世界は時代とともに進化していると勝手に考えています。よろしければ、あなたの「自己的事業」についての考えをお聞かせ願えません。わたしの悩みを解決するためにご協力ください。よろしくお願ひします。

### 「調和の旅」の後も「茨の道」？ 聖火リレーに関する一考察

早稲田大学アジア太平洋研究科  
黄 斌

一か月余りにわたるオリンピックの聖火リレーはようやく中国の国内に入り、それに対する応援と妨害をめぐる騒ぎは一応、沈静化に向かっている。今回の騒ぎは中国と国際社会に強いインパクトを与え、中国ナショナリズムの再度の暴発を引き起こし、その余波は2003年に西北大学で発生した寸劇事件による「反日」運動よりも遙かに大きいといえる。

筆者は、聖火リレーを、オリンピックを迎えるための恐るべき無駄づかい——そのお陰でうちの実家のまわりの並木はここ4年間に三回も植え直された——と考えているため、

北京オリンピックへの情熱が欠けていた。にもかかわらず、チベットの暴動事件をきっかけとする欧米のオリンピックボイコットの声や、聖火リレーの妨害事件が相次いだなかで、一面的な欧米の社会世論に唾然としてしまった。

中国の民族政策に反発すると言っても、ビジネスのためにチベットを訪れた漢族や回族の一般市民を殺したり、その店を焼いたりすることは許されないことである。「もっぱら中国政府の鎮圧の『悪行』を報道し暴動事件の被害者に無関心である欧米の報道は、常にメディアの自由と公正を唱える欧米の世論に対し、期待が外れたという感を禁じえない」、それは恐らく多くの中国人の共感であろう。

こうした失望感、一部の欧米メディアの報道ミス発覚やアナウンサーの過激な発言によってエスカレートした。だが私は、失望感があるものの、怒りは感じていない。9.11テロ事件に喝采を浴びせた一部の中国人の若者たちを考えれば、他人の不幸に同情心が欠けるということ欧米の世論を批判する立場にはない。また、騒ぎを好み、白黒で世の中のことを見分けようとする傾向がどこの国のマスメディアにも見られる。聖火リレーの応援より妨害行動が多く報道され、邪悪なキャラクターとされた中国側の苦情が無視されたのは、マスメディアそのものの傾向によること大きいのではないだろうか。欧米における中国のイメージはこれまでの数多くの事件の沈殿の結果生み出されたものであり、それを変えるためには中国自身の長年の地道な努力が必要であろう。

聖火リレーの進行に伴い、中国人の欧米マスメディアに対する信頼度が急落した一方で、北京オリンピックのボイコットは中国人の面子を潰すことであると受け止められた。欧米先進国に対する憧れとのギャップ、そして近代史で蓄積した劣等感と急速な経済発展による優越感が交錯した結果、ナショナリズムの

感情と化し、ついに聖火リレーの攻防戦に噴出したのである。

従来、友好国であったフランスは怒りの矛先になり、同国の大手スーパー、カルフルは深刻な不買運動に巻き込まれた。米国において「自由チベット」が書かれた T シャツを着た中国人女子留学生には、罵声や脅迫のメールが殺到した。さらに、韓国での聖火リレーでは、中国人応援者が反対者への暴行を行った。オリンピックを迎えるために醸成した外国人への友好ムードはガラッと変わってしまった。聖火リレー騒動の余波はこれからも尾を引くかもしれない。

今回の騒動をきっかけに中国人の西側のマスメディアと社会世論に対する不信感が高まった。中国の人権や環境問題に対する西側のマスメディアの報道は、これまで中国政府の悩みの種であったが、「外圧」として、ある意味で改善を促す役割を果たしてきたと考えられる。しかし、中国における欧米マスメディアの信頼度の低下は、そうした役割を機能不全とすることが予見される。

また、今回の聖火リレーにおいてチベット人の妨害活動が目立ち、欧米の多くの人々はその暴動に同情を寄せたが、一方で、中国政府の強硬派も国内のナショナリズムの強い支持を得た。このことは、漢民族とチベット族との感情対立をいっそう激しくし、交渉に当たる双方の柔軟性を削ぐ可能性がある。

さらに中国人の若者の間で、「今回の騒動は中国の経済発展と国威発揚に嫉妬した欧米諸国が、中国封じ込めを狙った陰謀であり、陰謀から逃れるためには国内問題を全て棚上げし、一致団結して欧米諸国に立ち向かうべきだ」とする国家主義が台頭した。もちろん、その方向に暴走すれば、真の国威の発揚という願望を適えるはずがない。

予想外の暴動事件で、「調和の旅」と名づけられた今回の聖火リレーは、茨の道を通ることとなった。いよいよゴールに到達するが、

待たれるのは花束だけではなく、茨の道の続きかもしれない。

## 国際結婚の食卓

名古屋大学大学院

サイハンジュン  
賽漢卓娜

一面に広がる、鮮やかな菜の花畑のそばを通るとき、真黄色い絨毯は青い空とつながっているのではないかと錯覚をしてしまう。私の車も、この絨毯で巻き上げてもらえないかなと子ども心を抱く。春の T 市に向かうと、いつもわくわくウキウキする。

わくわくウキウキさせるのは、景色だけでなく、人もそうである。ここは、私の日本での「田野（フィールド）」である。「国際結婚」でここにやってきた中国人花嫁の知り合い第一号と出会ってから、もうじき 7 年になる。ここから少しずつ知り合いが増え、今や私にとっては、本当の意味の「いなか」といえるかもしれない。ここで、数知れないほどのジャンルの食事を口にしてきた。「国際結婚」カップルの家に住み込み調査した二日目に、情けないことに風邪をひいてしまった。上海出身のお嫁さんは、「炖蛋（上海風味茶碗蒸し）」を持ってきてくれた。あれは、私が北京で味わった茶碗蒸しよりも繊細で、体をいたわってくれる一品であった。それから、この女性の家で家族同様に食卓につき、色々な料理に舌鼓を打ちながら皿を平らげていた。なんだか、急に自分が情けなくなり、長引く留学生活によって、自分はいまにも胃袋にたいして怠慢でいたことに気づいた。胃袋はいろいろな場面で抗議していたはずだが、自分は全然気にしなかった。中国の味をしみじみと味わいながら、ホームシックがまたじわじわと

込み上げてくる。

それなら、農村にやってくる中国の女性たちは、日本人の夫や舅姑のいるなかで、どのように自分の胃袋と日本の胃袋のバランスを取っているのだろうか。先述の女性宅では、二分法を採用している。彼女は自分と子どものために、上海風の豚肉蒸し焼きや青菜炒め煮や豆腐野菜スープ煮などを作り、それらを子どもと私は実に美味しく食べる。それに対し、旦那さんはいつものように味見もせず、決めて「まずそう」と一言放った後、私たちの反応を楽しむかのように待つ。この「味にうるさい」旦那のために、スーパーで惣菜を調度して対応しているようだ。あの冷めたソースかけのフライや砂糖と醤油がたっぷり利いた甘辛い煮物を美味しく食べる。食は、単純に命を維持するエネルギー源だけでなく、立派な文化だ！

でも、やはり十人十色。私は、T市にいるときは、まさに中国の熟語「吃百家飯（たくさんさんの家で食事の世話になること）」にあるように食べ歩いた。この地域では、お嫁さんは料理担当であることが多いので、中国のお嫁さんが食事の担い手であることがほとんどである。なかには、完全にこの地域の味としての和食をマスターした人もいる。ちらしずし、太巻き、天ぷらなど、田舎のベテラン主婦でもその腕前をみて思わず絶賛した。また、最初の頃、自分流に中国北部の肉中心の食事を提供し、家族は黙々と食べてくれたが、だんだんと自分も肉を食べられなくなって、日本の味寄りの料理を作るようになる人もいる。そして、これら中国のお嫁さんたちは、子育て真最中の母親でもあり、お弁当作りも実に日本人顔負けの人が多く。私は、日本人も混じった彼女たちのグループと一緒に花見に行ったことがある。満開の桜の下のブルーシートの上、笑顔の子どもたちが見守るなか、お母さんたちは優良品種をセリに出すように、優雅に、各自の弁当箱をゆっくりと開き、シ

ートの上に並べた。私は一瞬眩暈を覚えた。青菜のおひたし、ウィンナーのタコ姿焼き、地元風甘味巻き卵、おにぎり、たこ焼き、たまごとツナのサンドイッチ、枝豆などは、四角いお花見専用の箱のなかで、美しく色とりどりに私たちを誘っている。ここは日本だ、確かに日本の桜の下だ、では、私のお連れさんたちは何者だろうか？ 彼女たちはあれほど、この地域の味に文句をつけたのに、もう正真正銘の日本のお母さんになっているのではなかろうか。人間って不思議、母親ってもっと不思議だと思った（日本のお弁当の文化や花見弁当などの伝統が中国ではあまりないことをここで断っておきたい。中国出身の母親が子どもの弁当作りに苦勞をした話をよく耳にする）。

でも、これは彼女たちのすべての顔ではない。彼らは忙しい農作業や家事や育児の合間でも、ただただ、ぐうたれるかごろごろするのではない。ときには、積極的に名目をつけて「会議」を開く。私の存在も名目の一つとなり、滞在する間にたびたび各「会場」に足を運んだ。その会場は、外食なんかではなく、家族が比較的寛容なお嫁さんの家のことだ。これまで、出身地混ざりや日中混ざりの食事会だけでなく、東北人、上海人や「両广（広東と広西）」のグループの食事会にも参加したことがある。出身地で分けられると、標準語（北京語）ではなく、故郷の方言で会話する楽しみが増える。彼女たちは、乳幼児を抱えながら、故郷の方言で冗談を言って笑ったり、愚痴をいったりして食卓を囲む。食卓は今度こそ日本料理をほとんど見かけない食卓になっていた。里帰りの際、大事に持ってきた故郷の食材や、中華食材の店から届けてもらった食材や、どこかで手に入れたメンドリや豚骨を手間暇かけて調理して、ふるさとの味つけで作った料理がびっしり詰まっている。このときのお嫁さんたちの顔は、美味しさと笑いで、やや脂気に光っていて、着飾らない、ほっとした顔に見えた。桜の下でお弁当箱を開

けるときの顔とはまるで違う。

中国では、「民以食为天」という言い伝えがある。これは、政治的な意味もあれば、文化的な意味もある。それだけ食が大事な存在である。日本のいなかには嫁いできて、かつ、残っている中国の女性たちは、二つの胃袋と二つの顔でこれからも、移住の楽譜を演奏していくのであろう。うん、そう願いたい。

## ボランティア活動参加 in 北京

中国人民大学博士課程  
出和暁子

2008年のオリンピック開催に向け、北京では、人々の間でボランティア活動参加意欲が高まっているように思う。新聞紙面上でもやたらと「志願者」「志願活動」といった文字が目につく。これに肖ってというわけではないけれど、今回は、私が北京で参加しているボランティア活動について書いてみたい。私はボランティア活動に参加してみたいという願いはかねてからずっと持っていた。約7年の北京生活において、いくつかのボランティア活動には参加したことはあるけど、続いたためしがない。落ち着いて活動を継続する余裕と自分も楽しんで気軽に参加できる活動に出会う機会を持つまでに少々時間がかかった。

今、私が参加しているのはいずれも高齢者関連の活動である。一つは敬老院訪問。参加してそろそろ一年になる。これは、北京在住の日本人が始めた活動で、一ヶ月に一回という無理のないスローなスケジュールであるため、継続できている。

この敬老院について簡単に紹介する。ここは、北京市の黄金エリアとも言える所に位置し、北京の伝統建築様式四合院を賃貸して、政府により運営されている。現在、30人余り

の高齢者が暮らしており、平均年齢は約80歳。大方の部屋が四合院敷地内の中庭に面していて、アットホームな雰囲気でこぢんまりとしている。私たちボランティアがここで行う活動内容は、高齢者たちと一緒に歌を歌ったり（中国語や日本語の歌）、おしゃべりをしたり、大きな祝日の時にはささやかなイベントを開いてビンゴゲームや福笑いなどを企画している。北京の冬が長いので、一年のうちの半分は屋内での活動になってしまい、活動内容が限定され、単調になりやすいため、活動のパリエーションを増やすことが現在のボランティア参加者の課題だ。こういう時に、芸は身を助けるじゃないけど、何かできればなあと痛感する。子供の時に習っていたピアノ、大学時代にちょっとかじったマンドリン、中国に来てちょっと始めた二胡。どれも人様の前で披露できるほどの技能は身につけていない。悲しいかな…。これから半年ほど、北京は戸外活動に適したいい季節が続く。私たちの活動は、専ら、車椅子を引いたり、高齢者たちの手をつないで歩いたりして一緒に近くの公園に散歩に出かけることがメインとなる。敬老院の常勤職員の数が足りないため、なかなか外出することができない高齢者たちは、私たちが毎月訪問することを楽しみに待っているらしい。

もう一つの活動は、独居老人や高齢者夫婦世帯を訪問し、高齢者たちの話し相手になるという活動だ。同学（トンシュエ）から誘われ、三月から参加し始めたばかり。

これは、昨今、孤独感や不安感といった高齢者が抱える心理的要素が問題とされる中で、有志ある二人が個人的に数年前から始めた活動である。今では、市政府からの活動支援も少しずつ受けられるようになっており、また、いくつかの大学機関と連携をとり、ソーシャルワークや社会保障専攻の学生をボランティア活動参加者の主体とし、毎月二回、高齢者宅を訪問している。ボランティア活動組織は

当地の高齢者の状況を把握している社区居民委員会の協力を得て、独居老人や高齢者夫婦世帯を紹介してもらい、ボランティアによるサービスを必要とする高齢者との間に書面で契約を結ぶ。彼らに安心してもらえるよう、毎回、同じ学生が同じ高齢者を訪問することになっている。30分ほどの訪問で、後から高齢者とのやりとりを簡単に指定用紙に記入しレポートするといった具合だ。

私が当日、既に活動を長く続けている学生に同行し訪問させてもらった高齢者の住まいはいずれも一階であったが、同学が訪問した高齢者は、住まいが三階（6階建て住宅はエレベーターの設置なし）で、一人暮らし、足腰が不自由なため階段の上り下りが困難で、もう三年余りも家の外を出たことがない状況にあったらしい。正直、聞いて驚いた。実際、この広い北京に何年も外出したことがない、人と接触する機会のない独居老人が果たしてどれくらいいるのだろうか。現在、この有志が集うボランティア活動は試験的に北京市の二つの社区のみで実施されているが、今後、順調にいけば、徐々に広げていく予定らしい。地道な活動を継続することの重要性を感じる。

前者のボランティア活動が国を越えたお互いの精神世界を知る交流とすれば、後者のボランティア活動は若者と高齢者との世代を越えたお互いの精神世界を知る交流と言えるかもしれない。出来る限りこの二つのボランティア活動を続けていきたい。

## ■第38回 IIS（世界社会学機構）大会 日中社会学会主催セッションについて 陳立行（機関誌担当理事）

IIS 世界大会が 2008 年 6 月 26-30 日、ハンガリー・ブダペストで開催されます。日中社会学会はセッション主催のエントリーを行い、学会HPで報告者募集を行いました。セッションの概要は以下のようになりました。報告申し上げます。

- Theme of the Session: East Asian Values Within Global Society: Shared value, conflict and risk
- Session Convener: Norihiro Nakamura, (Ehime University)
- Session Program: 3 paper presentations, 20min /speaker, 30min/ comment and Q & A for each speaker
- Session Chairperson: Lixing Chen, (Nihon Fukushi University)
- Session Commentator: Norihiro Nakamura

### ○Paper Presentation 1

Title: Challenges to the Value of Moderation in Asian Culture: Western Standards and Asian Standards

Speaker: Lixing Chen

### ○Paper Presentation 2

Title: Ongoing Transformations in Urban Social Structure: A Case Study of Beijing  
Speaker: Yoji Osada, (Waseda University the Institute of Asia-Pacific Studies)

### ○Paper Presentation 3

Title: Buddhist Temples in China: Darwinian Adaptation to Market-Oriented Society

Speaker: Lihua Chen, (Chukyo Women's University)

### ○Comment and Q & A

## ■事務局からのお知らせ

### □住所不明の会員について

次の方々の住所が不明になっています。ご存知の方は、事務局までご連絡ください。

- ・吉田洋子 ・岡室美恵子 ・呉 万虹
- ・王 鳳 ・大橋史恵 ・富山英彦
- ・張 媛媛 ・徐 向東 ・単 聯成
- ・項 伯燕 ・華 金玲 ・張 春蘭
- ・趙 秀梅 ・劉 燦 ・深尾葉子
- ・王 曄 ・横浜勇樹 ・申 英子
- ・王 岩 ・楊 潤輝 ・張 原銘
- ・金 燕 ・鄭 楊 ・張 燕妹
- ・葛 慧芬 ・李 東輝 ・北原龍二
- ・屋葺素子 ・中山竹銘 ・謝 新華
- ・呉 秋紅 ・馮 文猛 ・劉 暢
- ・仵 曉敏 ・鄭英蘭 ・史 新田

### □会員異動

○2008年5月の理事会（持ち回り）で承認

#### 1. 入会

- ・若杉英治（大分大学大学院経済学研究科）
- ・鄭 南（中部学院大学）

#### 2. 退会

- ・森谷 健（群馬大学）
- ・佐々木衛（神戸大学）
- ・古城利明（中央大学）

### □お詫び

前号（ニューズレター52号）では、一部、印刷が不鮮明なために、読みにくい箇所がございました。事務局によるチェックが行き届かず、会員の皆様にはご迷惑をお掛けしました。また、特に、ご原稿をご寄稿くださった方々に対しまして、誠に申し訳なく存じます。この場をお借りしてお詫び申し上げます。事務局としましても、今後、再発の防止に努めさせていただきます。

## ■編集後期

ご案内のように、6月7日、8日に、流通経済大学（新松戸キャンパス）にて、第20回大会が開催されます。今回も盛りだくさんの内容です。奮ってご参加ください。

日中社会学会の事業は、年1回の大会と研究集会の開催、年数回の研究会の開催、『日中社会学研究』と『21世紀東アジア社会学』（6月に創刊号）の発行、年3回の「日中社会学会ニューズレター」の発行など、多岐にわたっています。今後は、中日社会学会との交流や新たな出版事業など、研究活動の更なる充実に努めてまいります。

しかし、台所事情は苦しく、会費納入率は半分あまりです。学会の企画運営に携わるスタッフは青息吐息です。学会は、研究者によるアソシエーションです。昨今の大学を取り巻く環境は益々厳しくなっており、研究を続ける上で、これまで以上にアソシエーションとしての学会が重要になっていると思います。会費未納分のある方、よろしくお願ひします。

---

### 日中社会学会ニューズレター No.53

発行：日中社会学会事務局  
〒673-1494 兵庫県加東市下久米 942-1  
兵庫教育大学・首藤明和研究室  
info@japan-china-sociology.org  
shuto@hyogo-u.ac.jp  
tel・fax: 0795-44-2165 (研究室直通)

○吉岡智子（事務局・業務補佐）

nicchu-jimukyoku@tau.e-catv.ne.jp  
tel・fax:089-927-9366

○日中社会学会・郵便口座

口座記号番号：00140-9-161801

加入者名：日中社会学会

○日中社会学会・公式HP

http://www.japan-china-sociology.org/

発行日：2008年5月

